

モンゴル友好使節団報告

JOA-MOA 友愛協定を更新

国際オストミー協会（IOA）の理念「世界のオストメイトは一つの家族」のもとに展開されている Twinning Program（2 国間友愛支援計画）の一環として、JOA は 2006 年よりモンゴルオストミー協会（MOA）と友愛協定を結び支援をしてきました。このプログラムは、恵まれた環境にある国の協会が未だ恵まれない国のオストメイトに、ストーマ装具の寄贈や情報の提供などの支援しようとするものです。

JOA は友好訪問団を派遣し、7 月 14 日にモンゴル国立がんセンター（NCC）において「JOA と MOA の友好・協力の改訂に関する覚書」を交換し、2006 年に締結した協定を更新することにした。

またオスト師へのストーリーションに関や友好交流、省への訪問、メイトを訪問、体験宿泊を行て 7 月 20 日にした。



写真：Mr.Tsogt MOA 会長(左)と笹岡 JOA 副会長(右)

し、3 ヶ年延合意致しまし

メイトや看護マリハビリテする医療講演 JICA や保健近郊のオスト草原でのゲルい成果をあげ帰国いたしました

1．友好使節団の結成

JOA-MOA 友愛協定覚書調印のためにモンゴルへ訪問する機会に、AOA 東京大会で培った MOA との交流をさらに強化し、また遊牧民の厳しい生活環境を体験して理解を深めるために、会員から希望者を募り友好使節団を結成した。使節団には 15 名の会員と家族、顧問医の進藤教授（ASSR 代表）、深井 ET/WOC 看護師（JWOCM 国際部長）を加えた 17 名が参加した。

2．JOA-MOA 友愛協定更新内容

協定の更新は、(1)オストメイトの医療と看護、ならびに福祉の向上を目指すために有益な情報の交換、(2)JOAに寄贈されたストーマ用装具のMOAへの無償提供、(3)その他相互の友好・協力を促進する活動を3年間延長する内容である。前協定ではMOAの10A年会費をJOAが負担していたが、MOAの基盤(設立は2005年)が固まりつつあり、MOA自身が負担することでこの条項は削除された。

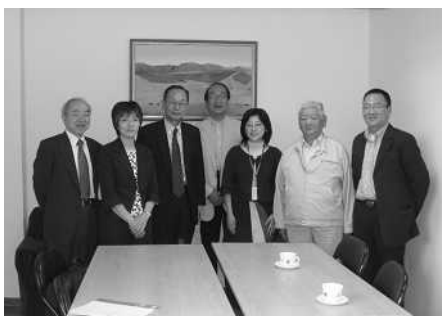
3. 調印式典とストーマ装具の贈呈

式典はJOA-MOAの交流に尽力された故高橋のり子さんのご冥福を祈り黙祷をした後、MOA会長E.Tsogt氏の挨拶、JOA副会長の笹岡訪問団長の挨拶と新井JOA会長のメッセージの紹介で始まり、続いて協定更新に関する覚書に署名し文書を交換した。MOA会長が3カ年の活動を総括した後、双方の参加者の自己紹介を行った。6月26日に日本から送付した装具が7月10日に届いており、出席したMOAのオストメイト一人ひとりに藤原・森川氏がこれを贈呈した。

式典に先立ち、現地TV(9チャンネル)の取材を受け、当日19時に放映され、また翌朝には新聞報道もされJOAの活動がモンゴル全土に紹介された。

4. 医療講演

午後からは、国立がんセンターのDr.Enkh-Amgalan氏の司会で、オストメイトや看護師を対象に進藤教授と深井看護師がストーマリハビリテーションについての医療講演を行い、また高石常務理事がAOA及びJOAの活動について講演を行った。フロアとの活発な質疑応答がなされた。



JICA 訪問 平野企画調査員(右より3人目)



保健省訪問 Enkhbat 局長(右より4人目)

5. JICA 及びモンゴル保健省

15日は(独)国際協力機構JICAのモンゴル事務所及びモンゴル保健省を訪ね、モンゴルのオストメイトへのストーマリハビリテーションの重要性とストーマケアにたずさわる看護師の養成に関する支援や国際協力について意見交換をした。

6. ウランバートル近郊のオストメイトを訪問

16日はウランバートルから35kmにある旧炭鉱の町ナライハにある国立病院

に入院中の女性（イレオストメイト）を見舞った。ストーマが陥没し肌荒れがひどく痛々しい状態であったが、進藤教授と深井看護師が皮膚保護剤やストーマ装具を用いて治療を行った。また、カザフ人の70歳のオストメイトの男性宅も訪問してしばし歓談し、ストーマ装具や日本からのお土産を贈呈した。

7. MOA との交流

第1日（14日）夕刻から、ハンパレス・ケンピンスキーホテルでJOA主催のレセプションを開催、モンゴルから労働・社会福祉省の高官、医師、看護師、オストメイト等20名が参加し、歌や踊りなどお国自慢を披露するなど交流を深めた。また19日には、MOAの招待でブラジリアンパーベキュー「シュラスコ」と少年馬頭琴アンサンブルで歓待を受けた。MOA幹部の娘さんが指導している楽団とのことで、日本の唱歌「ふるさと」も演奏された。乾杯を繰り返し、モンゴルの歌や日本の民謡などを披露しながらさよなら会を終えた。終了後、NCCにあるMOA事務所を見学してホテルへ戻り、翌朝の4時出発に備えた。

8. 今後の方向

JOAのモンゴルへの国際貢献が軌道に乗りつつあるが、新しくASSRやJEWOCMなどと協力してストーマリハビリテーションを確かなものにするために新たな展開が必要であり、行政や関係者の助力を得ることが不可欠である。発展途上国のオストメイトのQOL向上のためには、医療・看護・社会福祉制度などの面になすべきことが多い。モンゴルをモデルケースとして、着実に発展させ、アジアの仲間たちの幸福に役立つJOAであり続けたい。（訪問団長 笹岡勤記）



JOA 主催レセプション MOA 幹部と共に

JOA モンゴル友好使節団に同行して

日本創傷・オストミー・失禁管理学会*
国際交流委員会副委員長
(独)国立病院機構大阪医療センター
看護部 WOCN 深井 照美

モンゴルは、市街を抜けるとなだらかな山なみが見え、馬・羊・牛などを育む牧草がどこまでも続く大草原があり、本当に壮大な国でした。

JOA が、Twinning Program としてモンゴルへのサポートを開始していますが、同様に JAWOCM (旧 JAET/WOC) も、モンゴルへのサポートを行うことになっています。

しかし、モンゴルのストーマケアに関する現状を十分に知らず、新たな一歩を踏み出すことがなかなかできていませんでした。

今回、MOA の会員の話やウランバートル近郊都市のナイハラの国立病院に



ナイハラの病院にて (中央は進藤教授左は筆者)



におけるストーマケアの実態を見させていただきました。私がストーマケアに関わり始めた時は、すでに皮膚保護材のあるストーマ装具を使用することがスタンダードでしたが、粘着型装具が主流になっているモンゴルにおいては、装具は高価なものであると認識させられました。その中で、オストメイトの QOL のためにも、ET/WOC 教育の体制を早急に確立していく必要があります。ET だけではなく、ぜひストーマケアに関わる医師にも、「良い位置に管理しやすい

ストーマ」を造設する重要性も知ってもらう必要があると感じました。

今回訪問したことで、JOA - MOA だけでなく、ET 教育機関の設立、JAWOCM - MAET (今はまだ存在しないモンゴル ET 協会) の連携と今後つながっていくことを願ってやみません。この訪問を初めの第 1 歩として、

JAWOCM が行かなければならない道がはっきりしてきたのではないかと思います。

友好団の皆様とお話をする機会をいただき、手術の時は本当に苦労されていたとのことでしたが、アクティブに前向きに、今ある人生を楽しんでおられる姿を見せていただきました。写真のように全員で乗馬を楽しみ、久しぶりにのんびり旅行を楽しみました。使節団の皆様、お世話になりました。ありがとうございました。



JOA モンゴル友好使節団参加の旅

JOA 熊本県支部 支部長 前田 勝

全国大会（香川大会）でモンゴル友好使節団派遣へ参加の呼びかけがあり、本部周辺以外からの参加で、ためらいはありましたが参加を決意しました。

熊本県支部は、これまで中国、台湾、韓国と10回の海外オストメイトと交流をしてまいりました。本部国際部の企画での参加は初めてでしたが、アジアオストミー協会の中で日本オストミー協会がどのように友好的に貢献されているかを自分の目で確認したい。そんな気持ちで参加いたしました。

今回の旅行の主目的であるJOA - MOA 助け愛活動式典が、7月14日午前両国の代表者の挨拶と覚書改訂調印式がモンゴル国立ガンセンターで厳粛に執り行われ感無量でした。式典後、双方から自己紹介や意見交換会が行われました。特に、モンゴル国内で補装具が自由に買えない（装具が少なくかつ高価）、皮膚のかぶれが酷い（装具の装着が不適當、ストーマの形に必ずる装着と付属品



の活用が不十分など)、モンゴル国内の福祉制度が整っていない。装具では日本製が一番質が良いとの評価や意見等が出されました。

午後、進藤勝久先生と深井照美先生がモンゴルの看護師を対象に研修会がありました。質疑が活発に出されるなど盛り上がりのある研修会でした。日本から送り込まれた装具がモンゴルのオストメイトにJ O Aの代表から交付され、とても喜ばれている様子にJ O Aの一員として良い事をした満足感で一杯でした。

観光では、雄大な大草原と乗馬による古代遺跡巡り、そしてゲルキャンプを通じ遊牧民60万人の生活をかいまみることができました。大草原の道は未舗装の自然の道で揺れが酷く「胃腸がえし」で大変でした。また、30年ぶりの大雨でモンゴル人21名が死亡する等の災害もありましたが、日本から参加した17名全員病気や事故に遭うこともなく、パートナーに恵まれ仲良く楽しくそして初めて体験することが多くて印象に残る旅行が出来感謝しております。



体調はすこぶる快調で、ホテルでは洗腸を、ゲルキャンプでは自然排便をしました。双方ともトラブルなく出来ましたので、ずっと洗腸してきた私にとっては、高齢後の自然排便への切り替えに自信がつけました。

時間と体調がよければ今後も参加したい気持ちです。企画に携わられた皆様とモンゴルの国立ガンセンター及びモンゴルオストミー協会、更に現地通訳・ガイド・運転手等多くの関係各位に心から感謝とお礼を申し上げます。